

キズ（創）の手あて

シリーズでがんの手術は進歩していることをお話ししています。（当HP「がんってどんな病気？」）入院期間が短くてすみ、あまり辛くなくなってきたのは、手術そのものの進歩だけではありません。

専門の言葉になりますが、代謝栄養学、侵襲学（しんしゅうがく）、また、創傷治癒機転（そうしょう ちゆ きてん＝創傷を治す要因や仕組み）の解明など、多くの医学の進歩がかかわっています。

その中で今回はキズの手当についてお話しします。

昔は、“キズは毎日消毒し、風呂に入らず濡らさずに、そっとしておく”“触ると化膿するから触るな”が大原則でした。

キズがあるとお風呂に入れないと思っている患者さんは多いと思います。

ところが、当院でキズを縫った事のある方はお解りになると思いますが、今は時期が来たら“お風呂に入って石鹸でキズを洗う”ようになってきています。

キズを縫ったその日から出来るだけ入浴できるように保護フィルムを貼りますし、出血の心配がなければ、自分でキズを石鹸で洗って、絆創膏を貼り替えてもらっています。間違えてほしくないのは、その時期の判断が重要であること（これは医師の判断です）と、“医師の指示があった場合”はちゃんと洗った方が良いことです。

また、キズを覆う特殊な医療材料（創傷被覆材）も出てきています。キズから出てくる液（滲出液）を閉じ込め、密封された中で滲出液に含まれるキズを治そうとする物質（細胞成長因子）が働き、早くきれいに皮膚を再生させます。

ですから、“このままグチュグチュになるまで放っておいて”といったキズの処置もあります。これはいい加減なものではなく、実は最先端の研究の成果なのです。私自身、キズの手入れの変わり様を思うと、医学の進歩に驚かされます。😊